

京大LIMSプログラム

薬剤師からも期待

高齢化社会の課題克服に重要

京都大学は5月30日、同大学医学部構内で医療工学特別講演会を開き、薬剤師からの京大LIMS（医工連携）プログラムへの期待や、医療現場からの医工連携への取り組みや、その取り組みを教育に反映するための実例が紹介された。

医工特別講演会

始めのあいさつで上本伸二氏（LIMSプログラム実施責任者、医学部長・医学研究科長）は、「高齢化社会が急激に進む一方で、医療の担い手が減少するわが国において、医工連携によるこれらの課題克服が重要視されている現状を紹介した。こうした中、「京大大学LIMS Leaders for Integrated Medical System」プログラムは、2012年に文部科学省・日本学術振興会「博士課程教育リーディングプログラム」に採択された。

「薬剤師からのLIMSプログラム履修生への期待」をテーマに講演した井手口直子氏（帝京平成大学薬学部教授）は、ま

識を有する次世代の「総合医療開発リーダー」の育成を目的とするもの。今年度末には、5年一貫のプログラムを終了した第1期生2人が誕生する。



左から黒田、上本、近藤（LIMS協議会委員）、井手口の各氏

ニケーションシステムを紹介。

同システムは、携帯電話の家族が日々の服薬状況や生活状況を薬剤師や医療従事者に発信でき、その情報を共有できる仕組みで、フリーメッセージのやり取りで処方薬が変

更になった事例もある。井手口氏は、「小児患者を対象に携帯電話を利用した患者—薬剤師間双方向コミュニケーションシステム」も構築しており、これらのIT活用事例から、「平常時に患者は、忙しいような薬局にできれば電話をしたくないし、薬局から電話をもらうのもためらう」と指摘。さらに、「メールなら気兼ねなくやり取りでき、次に来局するまでの情報を収集できる」と強調した。

また、「何も話さない患者にとって薬局は価値ある場所ではないが、そのような患者も、ITを活用して薄くつながれば情報が取れる」と述べ、「LIMSプログラム履修生が工学系の専門性を生かして薬剤師職能に貢

献するヒントはその辺にあるのではないかと考えた。一方、黒田知宏氏（LIMS担当教授、京大病院医療情報企画部長）は、医療・介護の現場にイノベーションをもたらすAI/IoT（人工知能/モノのインターネット）への京都大学医学部附属病院の取り組みについて紹介した。「日本の電子カルテは、出来高払いの国民皆保険に対応するため、全での診療行為の記録を取っており、特に京大病院は秀でている。諸外国には、これほど濃密かつ精密に記録を取っている事例はない」とし、「データサイエンス部門も今のところ世界に立ち遅れているが、十分間に合うレベルにある」と強調した。